

学部の4回生は毎年「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組むことになる。

それぞれの担当教官が独自のテーマを設定し、学生はそのテーマに応じて、自らの望むコースを所属する研究室に関係なく自由に選択するといった、いわば卒業設計の前哨戦だ。その様々な作品の中から、2009年度は3コース7名、2010年度は3コース4名の作品をここに紹介する。

In the 4th grade, undergraduate students take the design class called 'studio course'.

Each professor sets up his original subject, and students select freely regardless of their laboratory.

These studios, so called, are 'the preliminary skirmish' of diploma projects.

We will introduce 7 works of last year and 4 works of this year among the various courses.

---

TAKEYAMA STUDIO

Junpei UTASHIRO  
Akira SODEYAMA  
Masashi NISHIKAWA  
Moe YASUKURA

---

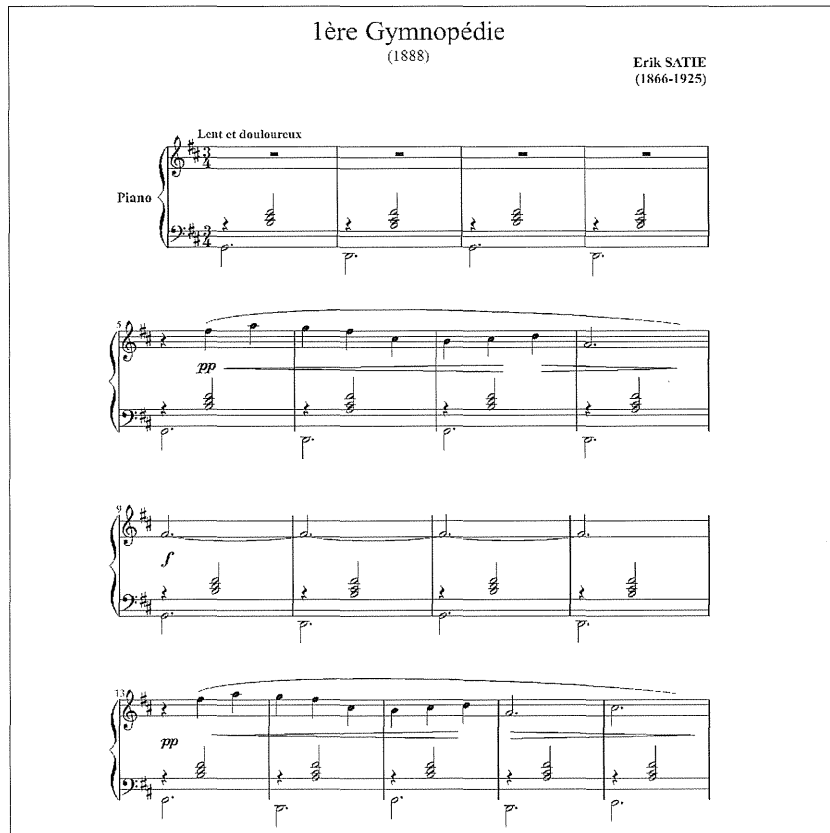
TAKAMATSU STUDIO

Shinya KINOSHITA  
Shohei TSUCHIDA

---

MON-NAI STUDIO

Daiki OHTAKE



## 空間の音楽化

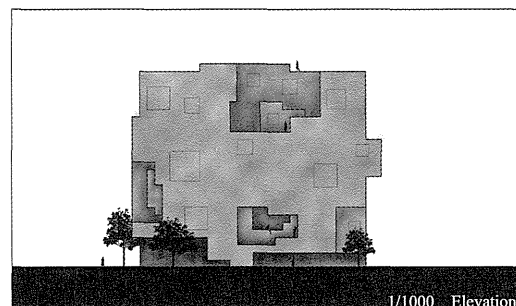
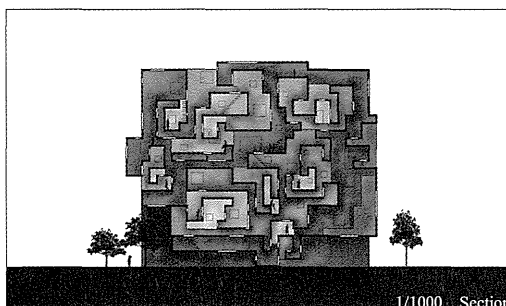
「ゆっくりと、苦しみをもって」

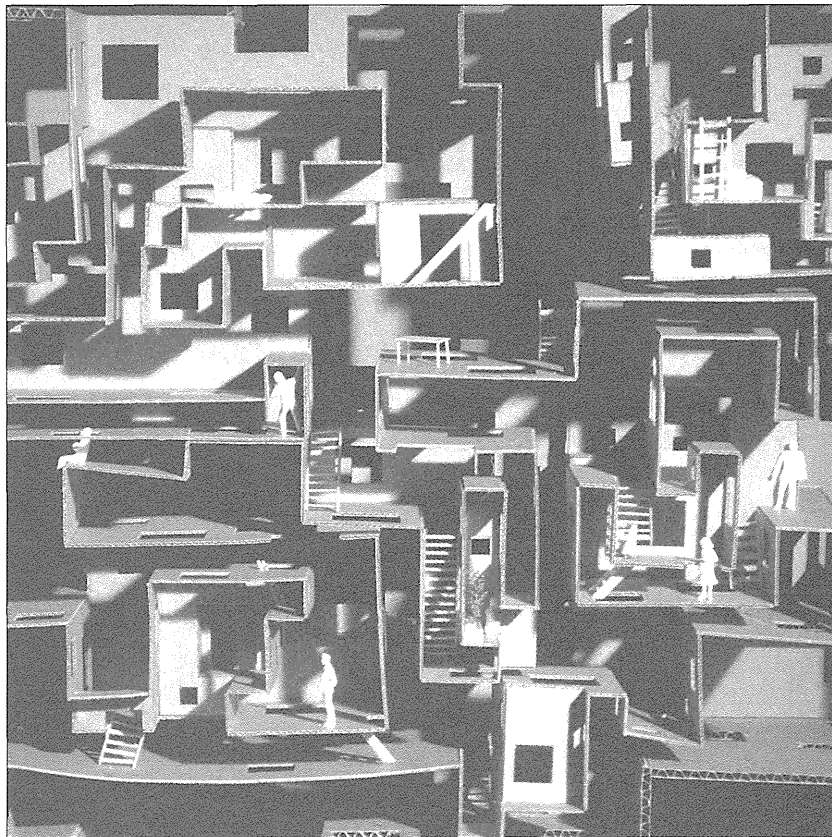
エリック・サティ

はじめに、音楽が与えられた  
流れゆく旋律を手がかりに、言葉を紡ぎ、想像を膨らませ、空間を創出した  
ここで音楽は一度、空間化された

この空間を体験するとき、音楽は再び流れはじめる  
しかし、それはもとの旋律ではない  
設計者により歪められ、観測者により様々な聞かれ方をする音楽

それはどんなメロディなのだろうか





## 相対性

「夢の中で、夢を見たわ。『夢だと思っていたことが現実で、現実だと思っていたことが夢だった』という夢なの」

寺山修司 地球空洞説より

夢の中で夢を見ること

夢の中で夢から覚めること

自分が意識している世界は本当に現実なのだろうか

夢とは相対的なものであり、自分が現実だと思っているものに対しての夢である

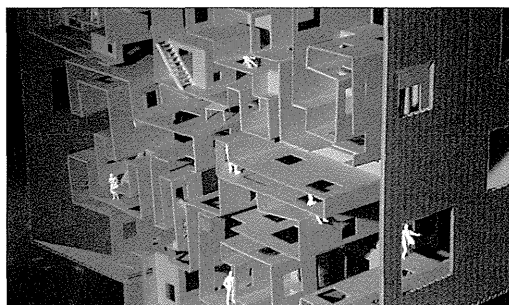
現実とは夢に対しての現実であって、本当の世界など存在しないかもしれない

内と外は明確な境界があって始めて認識される

その境界線が絡まりあった時、どこが内でどこが外なのかわからなくなる

内部と外部の関係性はすべて相対的なものとして認識され、絶対的な内部、絶対的な外部は融解する

ここでは、自分を認識する唯一の手がかりとなるのは、窓の向こうの風景だけである



1. 無意識からの言葉

音楽から空間への第一歩として、  
まずは何も考えずただ無意識に音楽を聴き、  
浮かんでくる言葉を拾う。  
そこに何か空間をイメージさせる  
言葉があるかもしれない。

出てきた言葉は

過去 別れ 死別 後悔 深度 暗

しかしこれらはまだ意識の中の言葉、  
もっと深く言葉を探る必要がある。

2. 無意識からの言葉Ⅱ

再び無意識から言葉を拾う。  
さらに今回は、無意識から浮かぶ言葉と、  
音楽を聴くときの感情を考慮する。  
異なるいくつかの感情において  
共通して出てくる言葉が、  
その音楽から得る、根源的イメージかもしれない。

・15時 暇  
ゆっくりと花開く  
古い山小屋  
モノクロ映画  
落ちるグラス  
舞うハンカチ

・20時 空腹  
ピアノの鍵盤をバーン  
ガラスが割れる  
ダイヤ  
落ちてゆく  
深い闇、海溝  
8ミリ映画の映写機

3. 「エウパリスあるいは建築家」を読む

言葉と空間の関係について、  
ポール・ヴァレリーの「エウパリスあるいは建築家」  
を読んで考える。

「エウパリスあるいは建築家」より  
建築的思考の程が感じられる部分を  
ピックアップし考察する。

その1つに「いまや言語とは建築技術だ」  
という文がある。  
これから、情緒的、感情的イメージは  
言語を介して形象化されるのではないかと  
考えた。

音楽を聴き、無意識から浮かび上がるイメージ、  
これらをいかに豊かな言語で表現し、  
形象化するか。  
鍵は言語である。

4. 物語

音楽には時間が存在する。  
時間の流れがあるならば、  
そこにはストーリーがあるのでないか。

何度も何度も聞いていると、  
旋律とイメージの結びつきが強くなった。  
それらは断片的であり、イメージであったが、  
そこから物語を作ってみる。

「小径の中、1人歩く男。  
彼の目は隣で笑う彼女の姿。  
しかしそこに彼女はもういない。」

ゆっくりと回想する。  
何気ない日常。  
ささいなことでも離れゆく心。  
そして別れた。  
遠くへ消えて行く彼女の背中。

そして男は我に戻り、またゆっくりと歩き始める。」

この物語、つまりは言葉の集合から空間のイメージ化を試みる。

5. 空間のイメージ

これまでのプロセスで  
音楽から浮かんできた言葉から生まれた、  
空間のイメージ。

・現実と想の往来、対比  
・深い闇  
・地下へととがる  
・行き着く先はいつもの日常  
・時間軸

そして空間へ。

6. 音楽から生まれた空間

ひび割れた空間と屈折する動線。  
内と外を幾重にも繰り返しながら、  
いくつもの空間の中を滑り抜け、  
ゆっくり深みを増してゆく。

音楽の旋律を滑り抜け、

「想」へと戻ってゆくかのごとく。

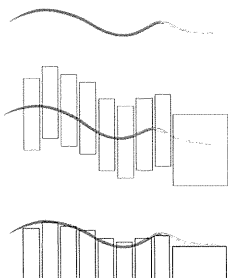
そして旋律の向こうにあるものは

いつもと変わらない日常。

また毎日の繰り返す。

旋律を抜けて

Erik SATIE Gymnopédie



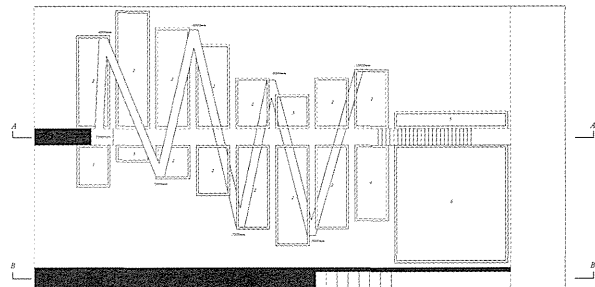
Gymnopédieにおける最も印象的な主旋律

旋律は建築にリズムと静寂を与える

折曲を時計回りに40度傾きを定めてみる

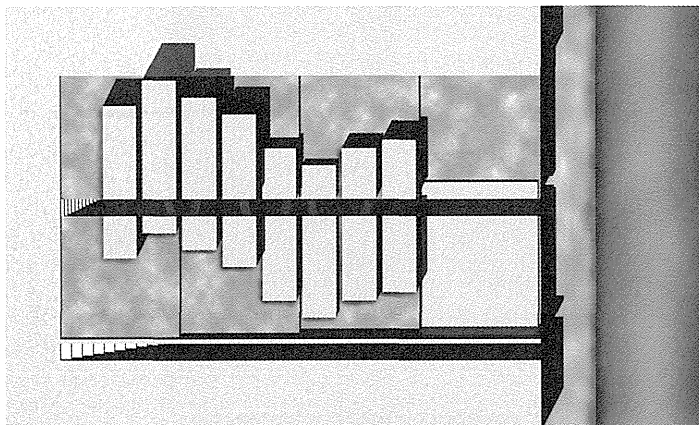


Site plan 1/12000

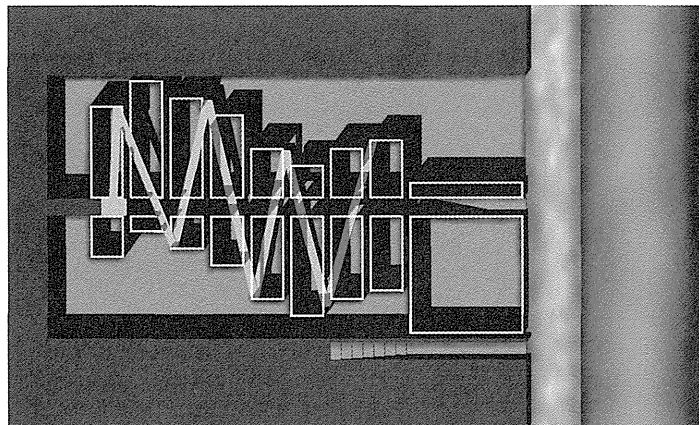


Plan of -3500mm 1/900

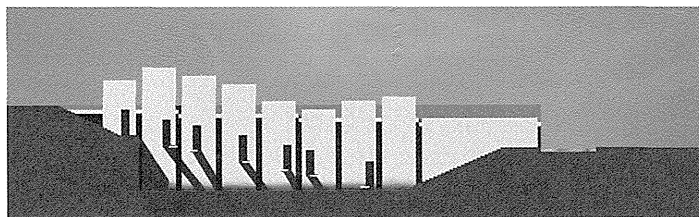
- 1. Entrance counter
- 2. Exhibition room
- 3. Rest space
- 4. WC
- 5. Warehouse
- 6. Cafe



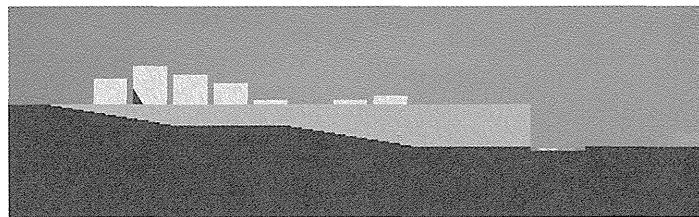
Roof Plan 1/900



Plan of -3500mm 1/900

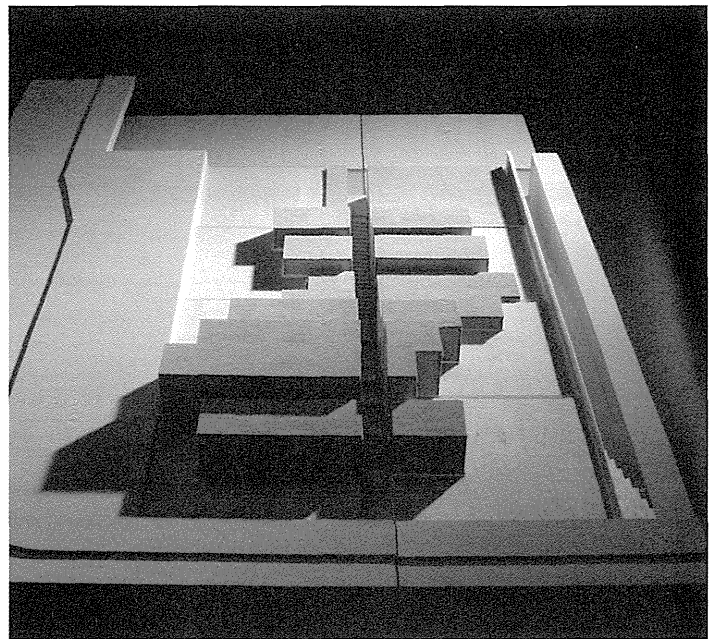
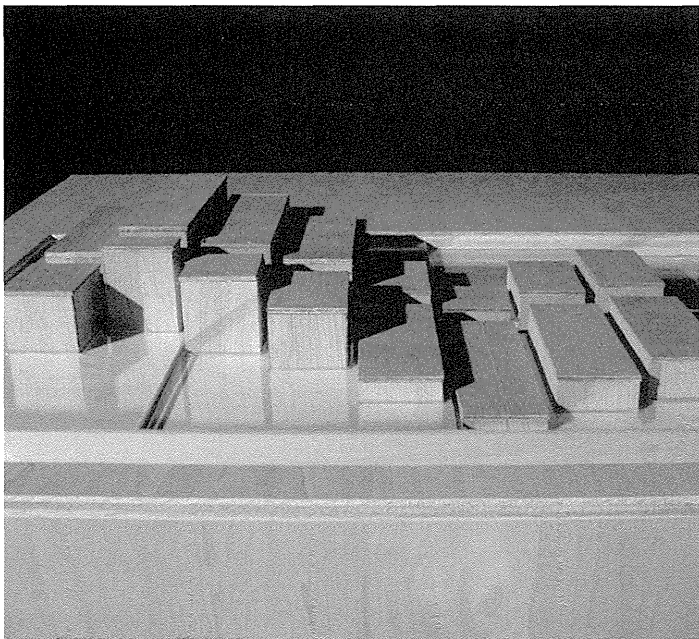
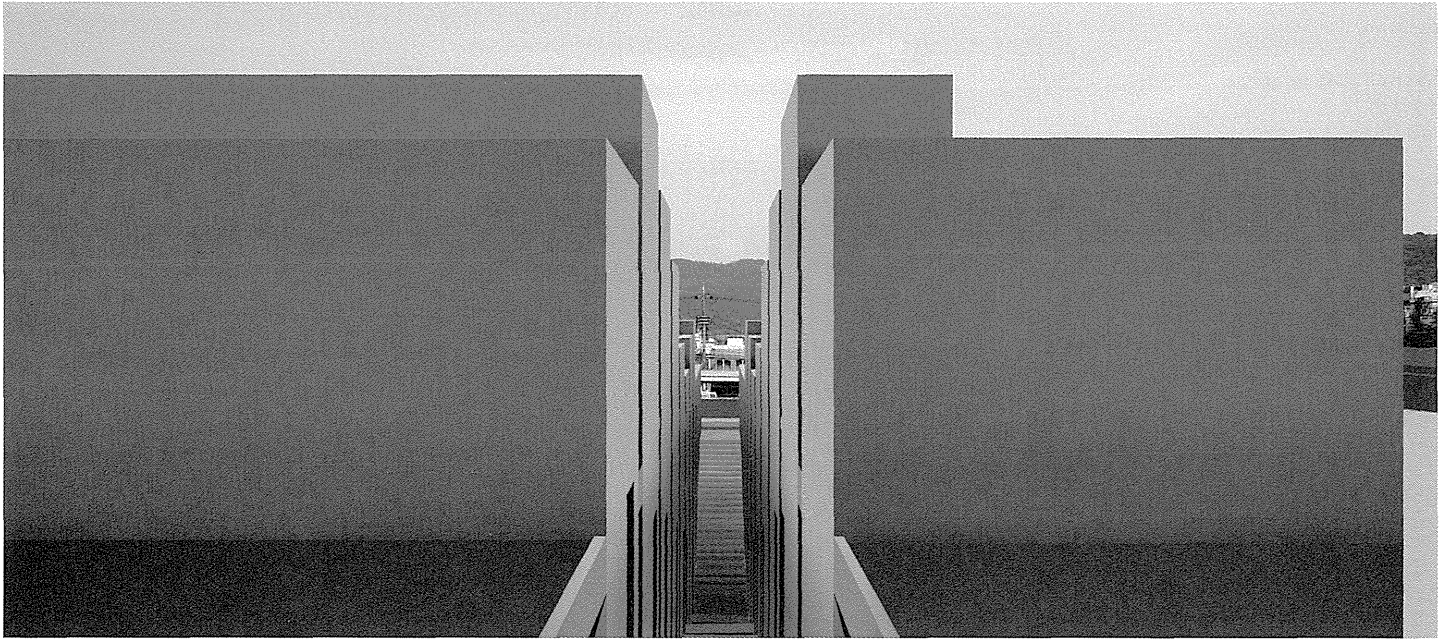


A-A' Section 1/900



B-B' Section 1/900





Axonometric

Section 1 / 500

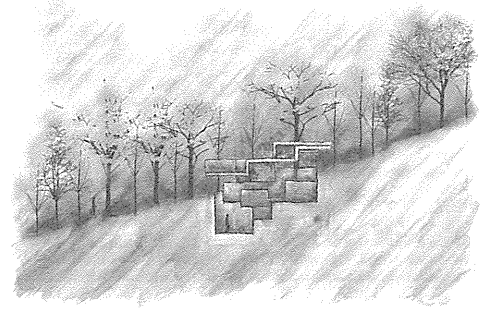
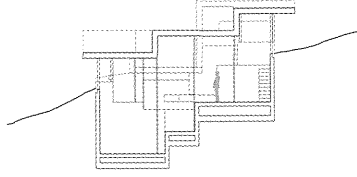
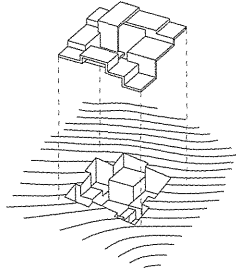
Section Drawing

Site Plan 1 / 5000

Roof Plan 1 / 1000

Ground Plan 1 / 1000

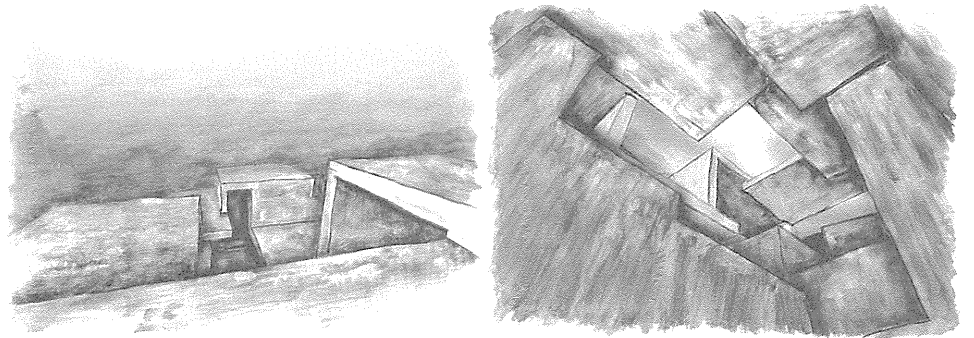
Plan Drawing



Gymnopédie / Erick SATIE



## 天と地のあいだ



Section



### 空間の音楽化

「建築は凍れる音楽である」と言われるように、ルネサンス以降盛んに建築と音楽を関連付ける試みがなされてきた。音楽と建築は共に非再現芸術であり、構成、比率、調和、音色（素材）などいくつかの共通点も挙げることもできる。

音楽と建築は作り手の考える主題あるいはコンセプトのもとで譜面や図面という媒体を通じ制作される。譜面と図面は音楽や建築を実現するためのスクリプトであり、実際の音楽や建築を体験することによって受ける印象や感情を完全にとは得られない

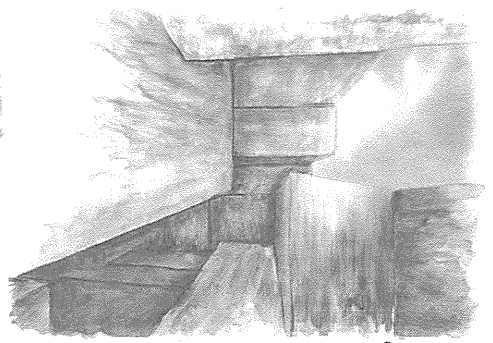
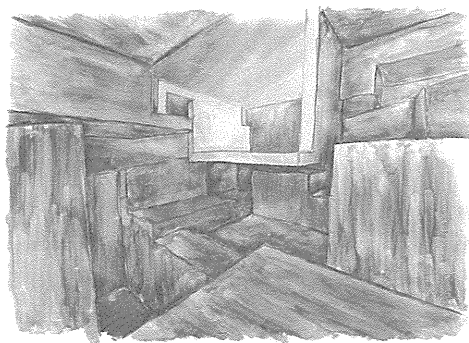
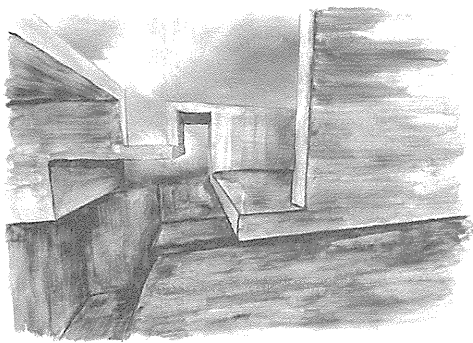
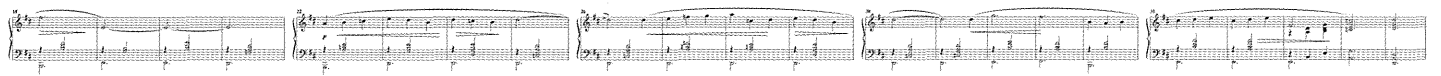
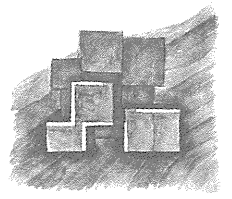
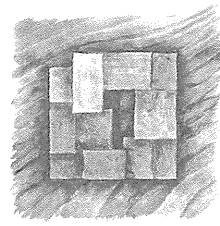
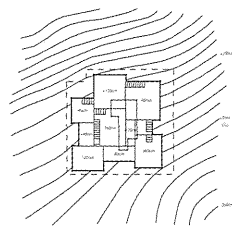
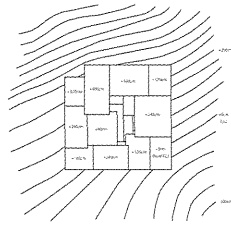
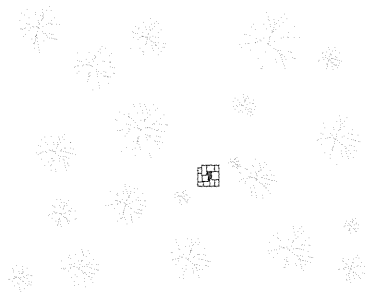
ぶんかえて作り手の主題がより明快に伝わることも多い。あるいはジョン・ケージによる図形楽譜や未来派などのアンビートのドローイングに見られるように、それらが本来の音楽や建築を表現するものであることを離れ、それ自体で独特の言語によるエクリチュールとなることもある。音楽の譜面には楽器ごとの時間軸に分節された音が配置され、高さや長さ、その強弱によって周波数の異なる音の連続体が表現される。これは建築の図面における壁や床などの要素の配置、それらの構成という手法と同じである。ルネサンス期に譜面や図面の記述法は大きく進歩し、古くからコンセプトをイ

メージや言葉で表現し、それもとにして演奏されてきた音楽が、記譜法の確立により音そのものの調和や旋律により構築することが可能になった。建築においてもさまざまな要素からなる部分を付加的に組み合わせることで統一感のある全体を作り上げるようになった。

譜面や図面がコンセプトを表現するイメージや言葉と実際に実現される音楽や建築をつなぐものであるとするならば、音楽と建築をイメージや言葉を介して結びつけることができないだろうか。そうすると音楽を聴いて得られる印象や感情が建築によって表象され、空間を体験したときに同じ印象

を受けることができるはずである。音楽によって得られるイメージは一過性があり、個人的なものであることも多いが、その最大公約数を求め、幾何学的、客観的なものに近づけることができないかと考え、オートマティスム（自動筆記）により音楽からイメージや言葉を再抽出することを試みた。

エリック・サティ作曲のジムノペディ。簡素な曲調を持つピアノ曲であり、独特の哀愁を帯びた旋律は人の心を落ち着かせる。オートマティスムによって得られた言葉や言葉を分析してみると、空や光、空気、空間の広がりに関する言葉やイメージ、それに対し地中や海や、心の内面の奥深くに沈ん



でゆくような音楽やイメージを多く見つけることができた。これを譜面を通して分析するとジムノペディは主旋律が高音フレーズと低音フレーズの繰り返しでできていることがわかる。建築における重力場と同じように音場においても周波数が高い音が「高音」、周波数が低い音が「低音」と定義されるが、「高音」は字義通り空高く伸びてゆくようで、「低音」は地中深くに沈み響くように感じる。また、ジムノペディにおける同じフレーズの「繰り返し」は終わることの無い循環である。方向性の自由が奪われ、日常の時間の流れと切り離され、二度と抜け出すことのできないような時間の牢獄の中で無限に循

環するのである。地に足を着いているのか、それとも天に浮いているのか、そのどちらでもなくそのあいだを浮遊し、天にも地にも属していない、そんな状態のようである。

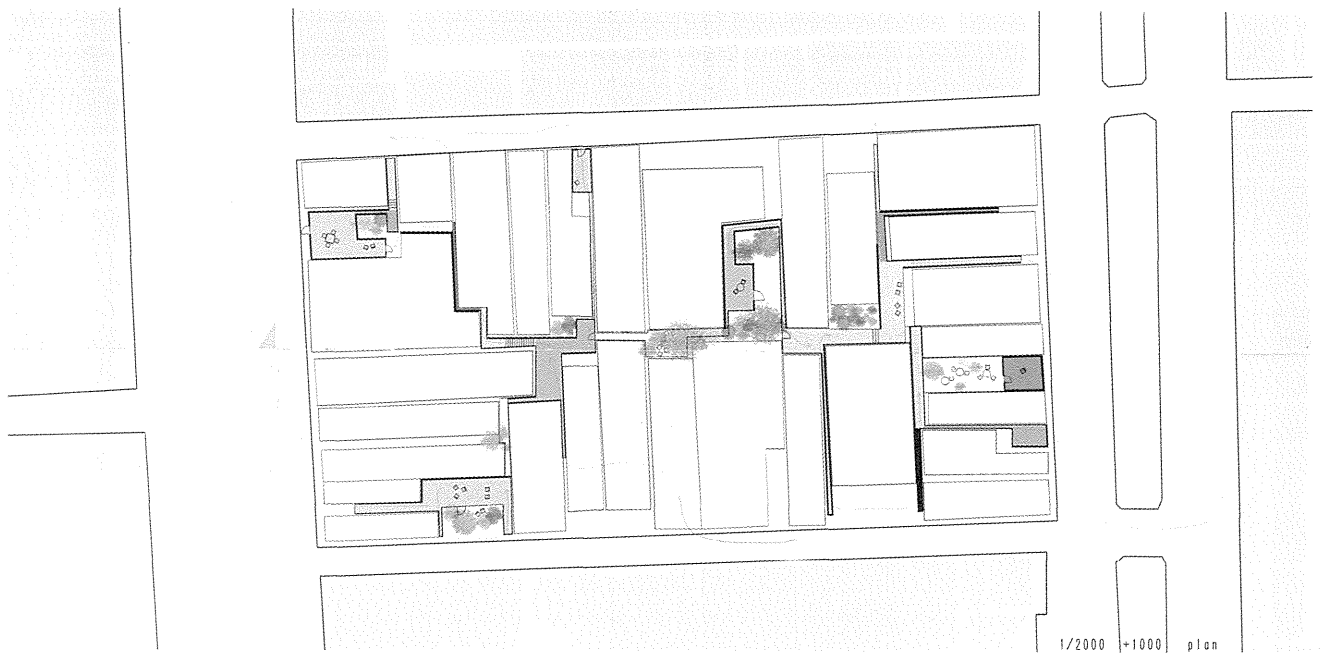
この建築は音場のように波打つ天と地のあいだの空間を生み出す。自然の空間の広がりから断絶され、そこに虚の中心が与えられることでその周囲に循環運動の場が現れる。あいだの空間の循環の中では天と地の高さが変化してゆき、そこを歩いてゆくとところどころ周囲に広がる自然が垣間見える。それは断絶されたはずの自然である。ひとたびこの循環に入り込むとそこから出るのは容易で

はない。循環の途中で自由に外に出ることはできず、唯一可能なのは循環の中でのフレーズの途切れ目である。その小休止は現実に戻るための機会を与えてくれるが、再び循環が始まるであろうことも暗示している。

この建築では波打つ天と地が領域を形成している。壁はない。壁は物理的にも視覚的にも内部と外部を断絶する。日本の木造建築の多くは壁ではなく床と天井によって領域を作り出す。そこは空間的には周囲とつながっているのだが、その段差なり床なりが意識的な境界となり、それは時に神聖化された場を生み出し、時に身分や立場の違

いを顕在化させ、そこに踏み入れることは決して容易ではない。ミース・ファン・デル・ローエの天井と床、そして自由な壁による構成はユニバーサルスペースであり、内部は全体としての外部の一部として存在するため、壁やガラスの配置は自由ではあるが、領域の形成においてはなくてはならないものである。

音楽は現実世界の延長線上にあるものではなく、断絶され、不連続である。しかし私たちが音楽を聴くとき、受ける印象や感情は常に現実世界のものである。この建築における「内部」と「外部」はそのようなものであると考えている。



#### ふちどり

敷地は三条六角を東に曲がった、ほとんど飲食店の入った小さなビルがひしめき合う一角である。各々のビルの各階では、仕事帰りのサラリーマンや学生が、知人と何か話しこみ、それぞれの夜を過ごしている。そのとき、彼らは無意識に、相手と自分を包み込む仮設的な空間を形成している。その空間は話していた内容や相手との関係によって、楽しい空間であったり、悲しい空間であったり、あるいは気まずい空間であったりするが、それらは全て感情に名前のある空間である。

そしてビルから外に出ると、自分たちを取り巻く空間を覆っていた、目に見えない薄い膜が弾けることがある。いきなり真っさらになったような感覚になる。そのときに感じた。

人間の心の中には喜びや悲しみといった名前のある感情が点在しており、その間には、日ごろ認識できていない、名前のない感情で埋め尽くされているのではないだろうか？

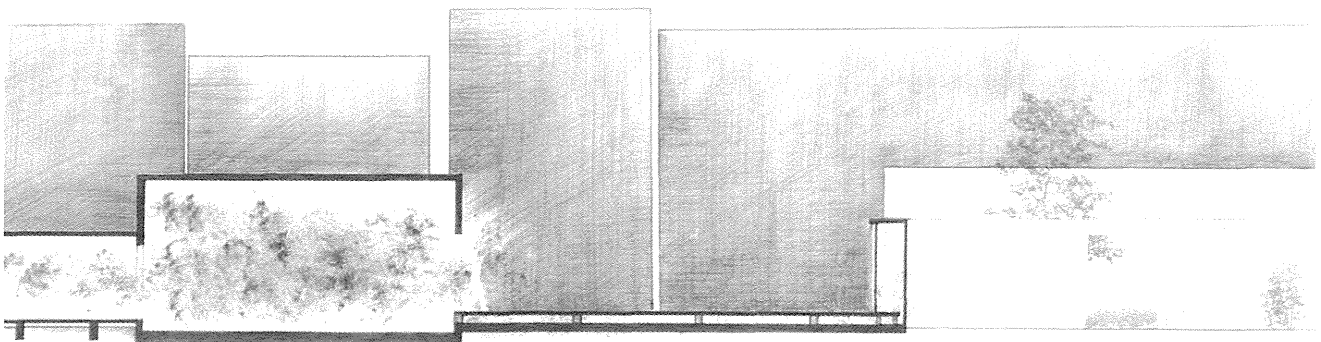
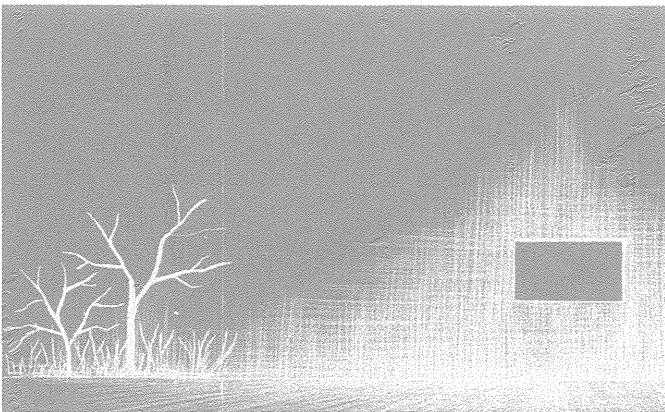
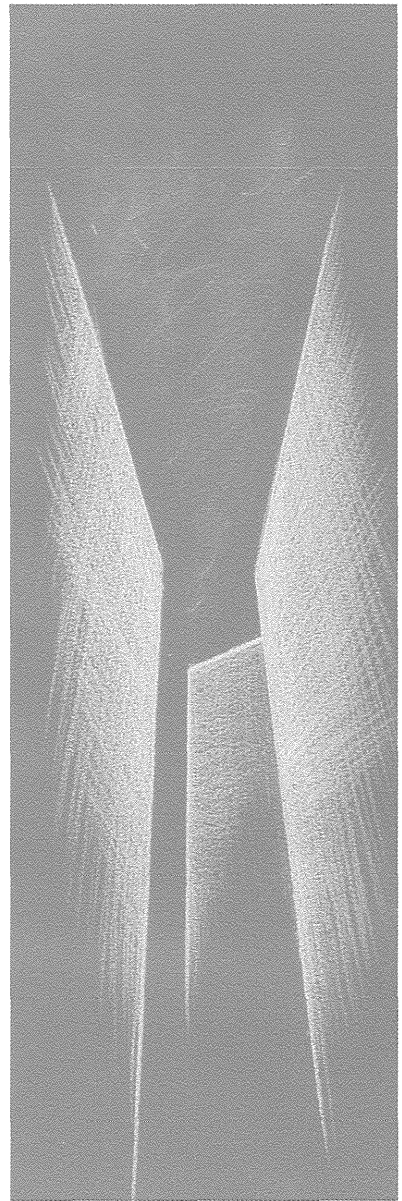
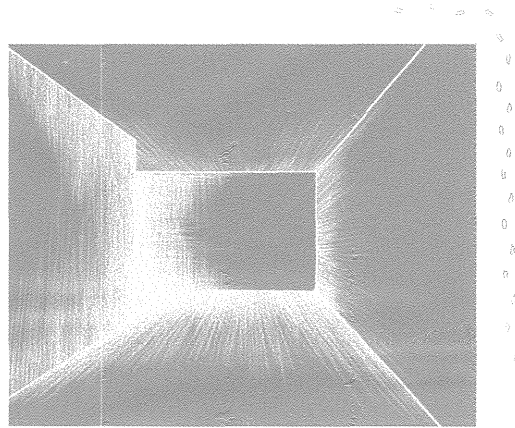
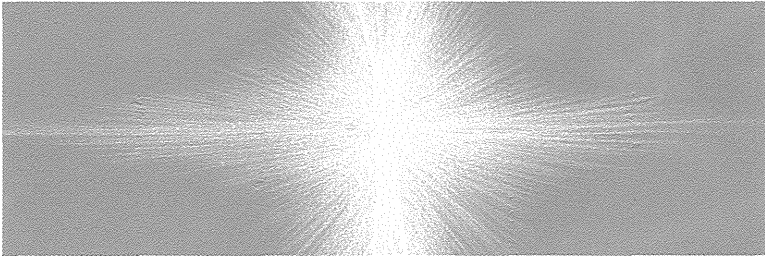
喜びという感情の一瞬のきらめきを表現したベートーヴェンの「歓喜の歌」とは対照的に、エリック・サティの「ジムノペティ」は、この名前のない感情の輪郭線を縫うように進んでいく。それは同時に喜びや悲しみの輪郭線でもある。

聴き終えた後、言い換えれば、感情の輪郭が縁取られた後、それぞれの大きさや位置関係が確認できた心地よさと同時に、認知できていなかった感情の存在に大きな驚きと不安を覚える。

仮設的な小さな空間の集合を鉄筋コンクリートで物理的に閉じ込めたビルの中に、何の機能も持たない空間を用意する。ビルとビルの間の空間は元々存在するが、私たちがそれに気づくのはごく稀である。すなわち、「間の空間の輪郭」と呼ぶのが正しいのかもしれない。そこでは、隣のビルから漏れ出る知らない人達の騒ぎ声や、話しながら口にする料理の残飯の匂いや、何気なく浴びているエアコンの室外機の低い音や、そこから出る何とも言えない生ぬるい空気が充満している。雑草が、あるいは様々な種類の虫が、ビルから排出されたそれらを消費している場面に立ち会うかもしれない。

通りから一歩中に入ったら、そこは日ごろ意識していない要素が凝縮された空間であった。自分が認識していた空間が全てではなく、こんなに身近にそれとはまったく異質の空間が広がっている。それを目の当たりにしたときの、頭を打ったような感覚は、「ジムノペティ」を聴いた後のそれに限りなく近いように思う。



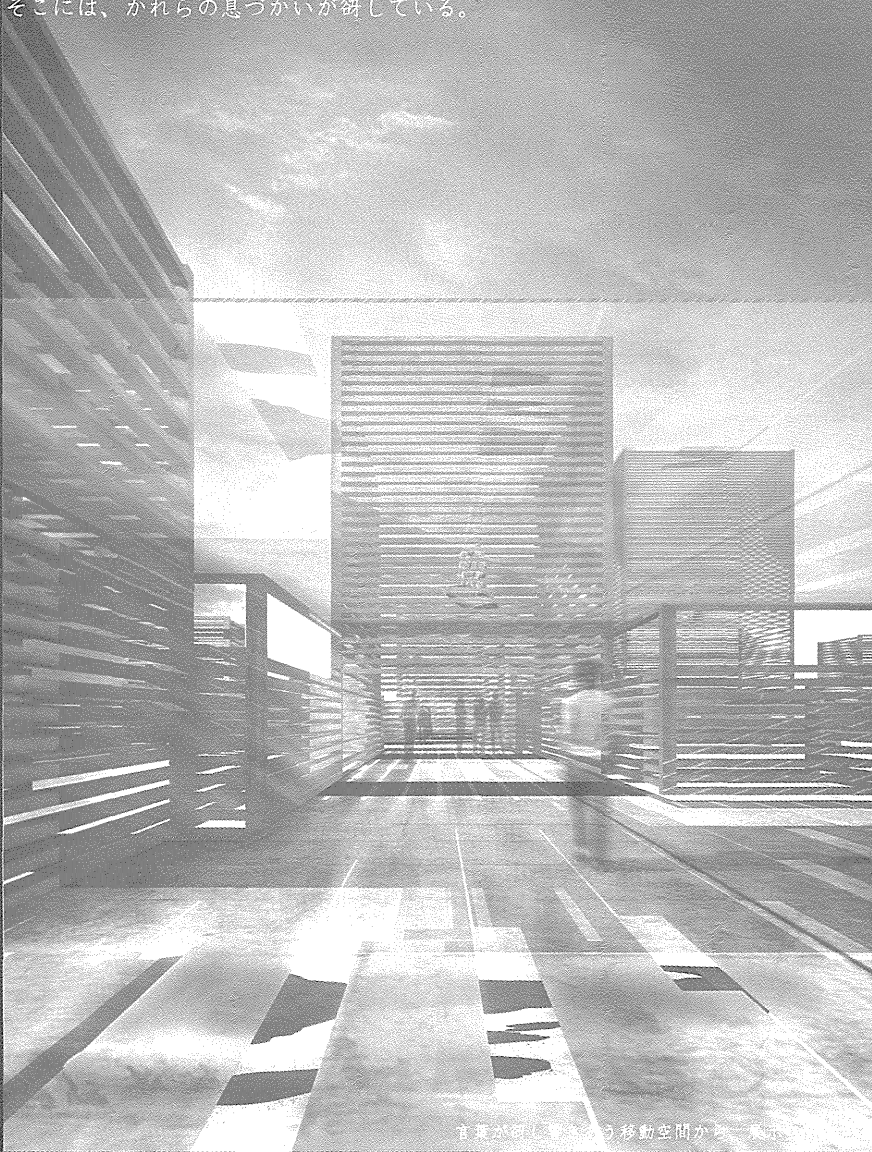


1/300 section

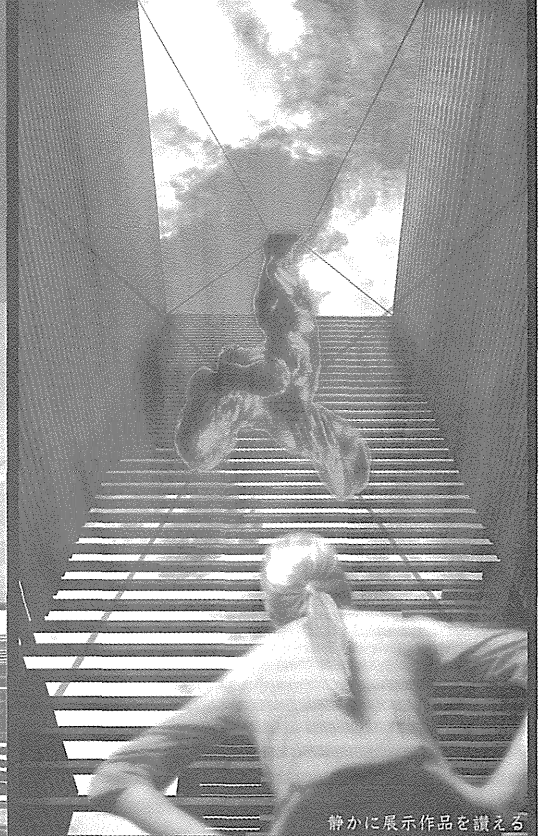
# CAMILLE CLAUDELL MUSEUM

【隙】 すけき＝透き明き  
 透きとは、隙間を生むための操作である。  
 明きとは、その操作の結果として得られる効果、現象である。

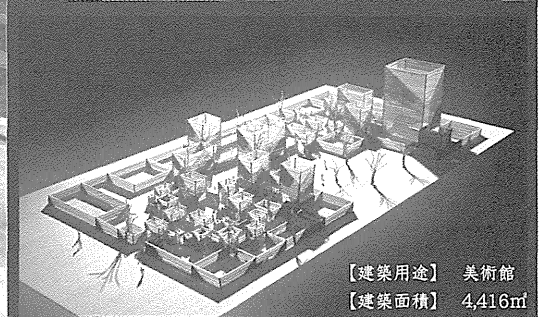
モノは光を浴びて初めて主張する。自身のイチ、カタチ、ソザイ、イロ……。そしてもうひとつのモノが同様に主張をはじめると、やがて2者の中で会話が始まる。どんな話をしているのだろう。会話の内容は、かれらの間に存在する「隙間」から推し量ることができる。恋人達は密接し囁き、友人達はどんな場所でも大声で笑う。のぞいてみよう、その隙間という「空間」を。そこには、かれらの息づかいが響いている。



言葉が明し響き、移動空間から、展示空間へ

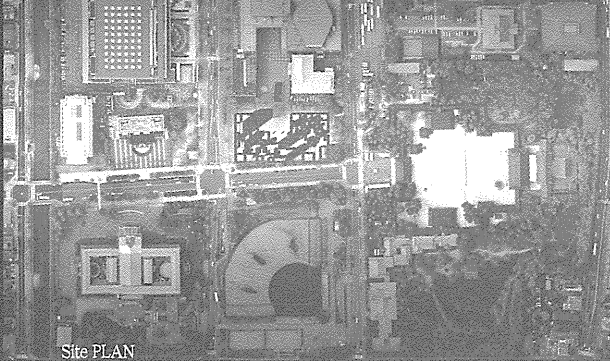


静かに展示作品を讀める

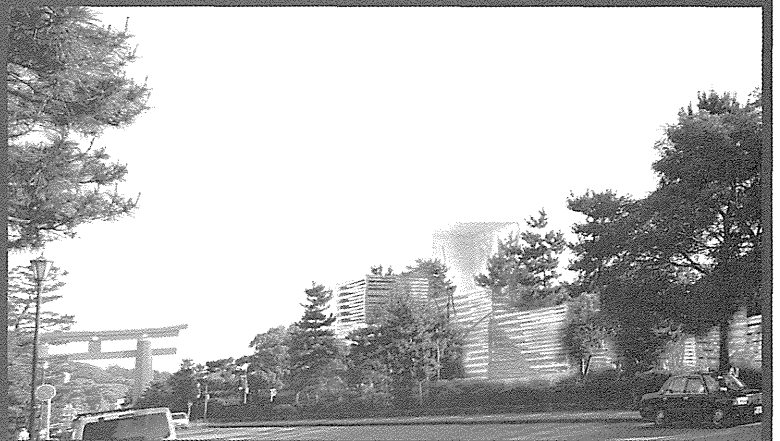


【建築用途】 美術館  
 【建築面積】 4,416㎡

敷地は京都市岡崎公園。  
 京都市の文化ゾーンの中であり、京都会館に隣接する。  
 平安神宮の参道に影をひそめて佇む。



Site PLAN







【作品】



【展示】

生涯の60あまりの作品のうち、32点を保存・展示する。作品を収めるヴォリュームは、作品のサイズに比例する。他でもない、彼女のための美術館となる。年代順に並べられた作品を巡れば、彼女の生涯を垣間見ることができるかもしれない。

【解説図】

すべてのモノは必ず一つ以上の他のモノと物理的につながる。その関係は物質そのものとして、あるいは影として空間に影響する。物語が生まれる。

light



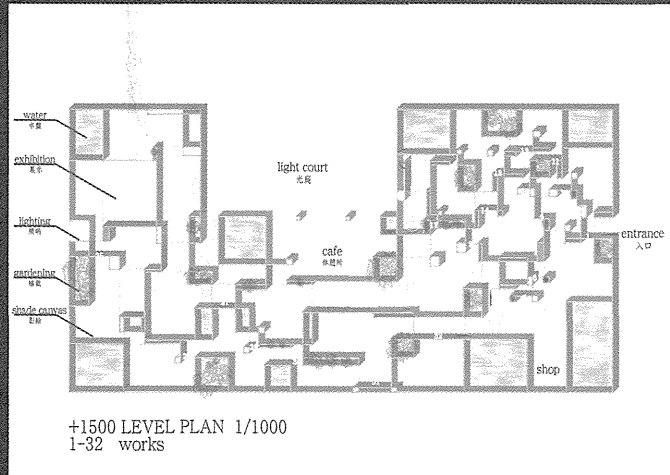
モノは光を浴びて初めて主張する。自身のイチ、カタチ、ソライ、イロ

モノは2つ以上存在すれば関係性をもつ。相手とのサイ、ムキ、キョリ、ジョウゲ

モノは集まって意味ある形を形成すれば、新たな一つのモノとして認識される。

集まったモノどうしがさらにまた関係を持ち始める。

【平面図】

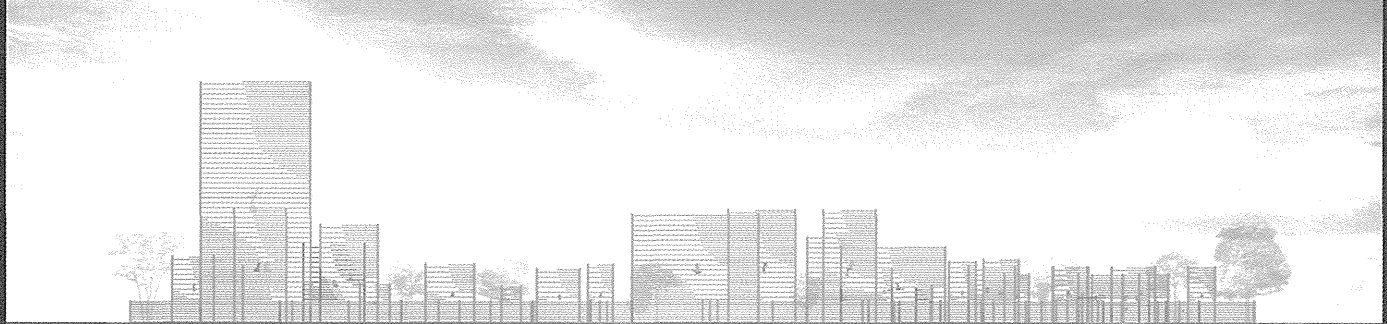


【案内図】



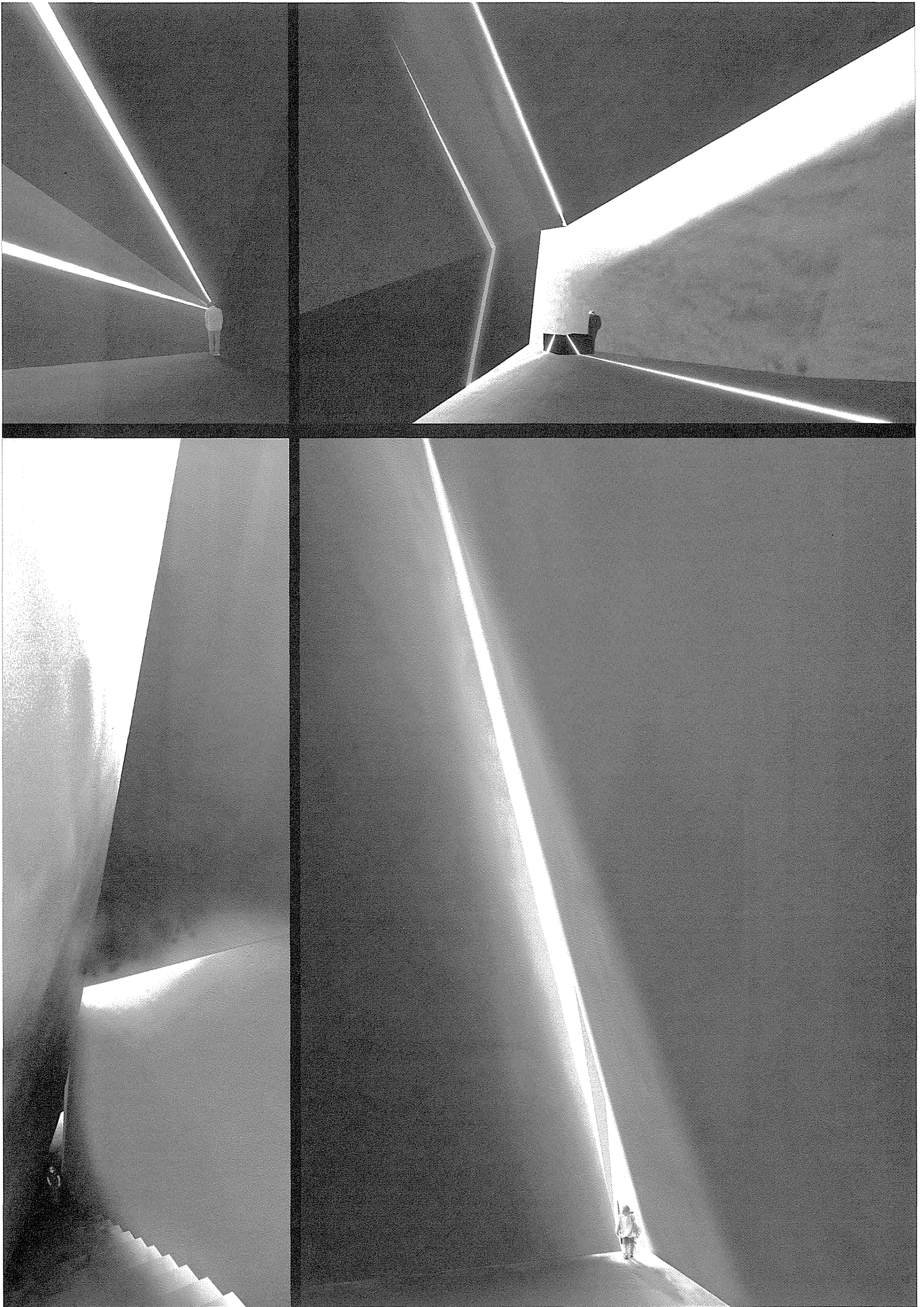
【立面図】

刻まれた無数の光が彫刻を彫刻たらしむように、組上げられた無数の物が建築を語りかける建築たらしめる。全体は部分の集合に他ならない。

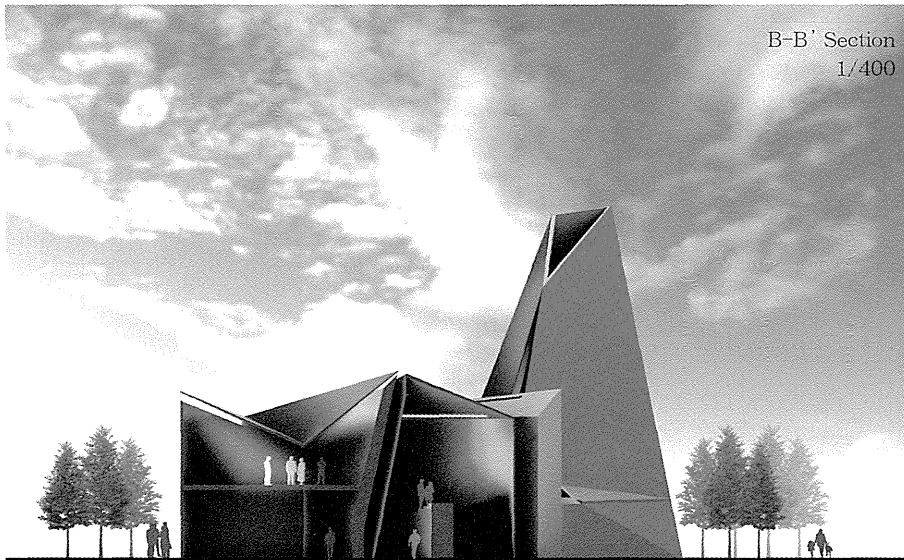


South ELEVATION 1/500  
1-32 works

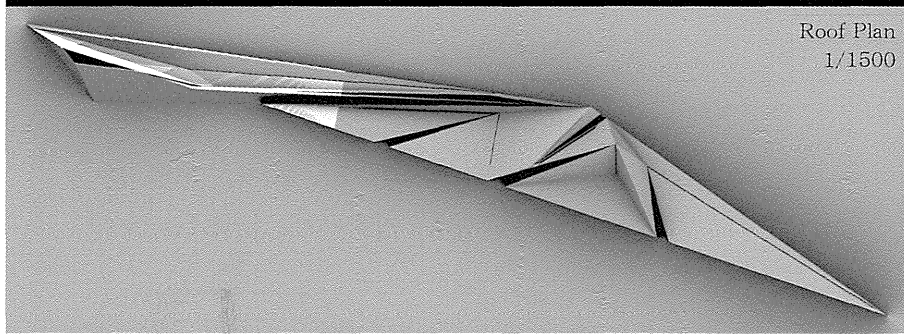




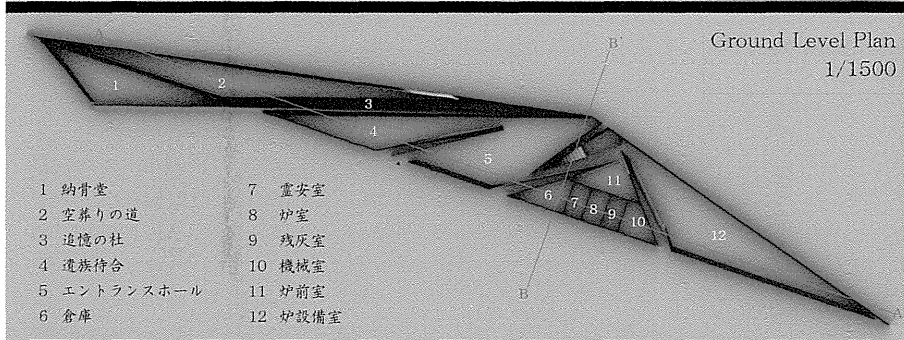




B-B' Section  
1/400

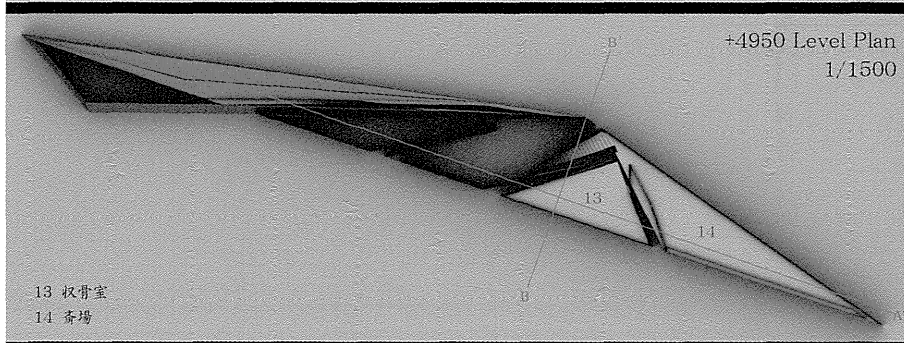


Roof Plan  
1/1500



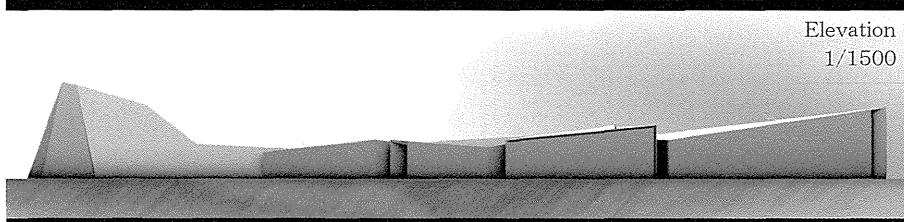
Ground Level Plan  
1/1500

- |             |         |
|-------------|---------|
| 1 納骨堂       | 7 霊安室   |
| 2 空葬りの道     | 8 炉室    |
| 3 追憶の社      | 9 残灰室   |
| 4 遺族待合      | 10 機械室  |
| 5 エントランスホール | 11 炉前室  |
| 6 倉庫        | 12 炉設備室 |

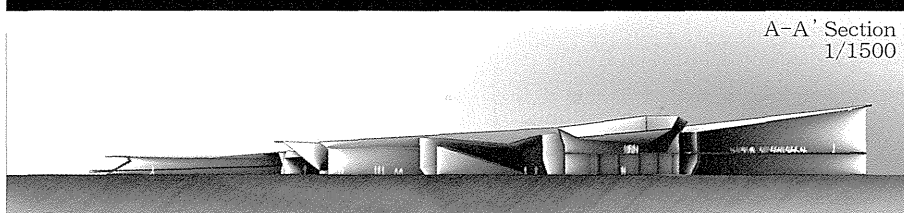


+4950 Level Plan  
1/1500

- |        |
|--------|
| 13 収骨室 |
| 14 客場  |



Elevation  
1/1500



A-A' Section  
1/1500

# 光の葬祭場

the Funeral hall of LIGHT

かつての葬送の儀、野辺送り。その道として知られる旧五条通りに面する鴨川沿いに、炉室機能を備えた葬祭場を構想する。  
 「シーンから建築は立ち上がらないか」その問いにひとつの解答を示す。  
 遺された者たちが故人に思いを馳せるその時、シーンの集積から構築されたこの建築は、浸透するかの如く彼らに語りかけることが出来るであろうか。



# CRE-STAL CITY

四条室町

呉服・繊維業の間屋街として発展した室町通りに面するこの場所には、今も多くの間屋が立ち並ぶ

この場所も例外になく都市開発の影響を受け、スケールの異なる建築が混ざり合う

様々なスケールが混ざり合い、職住共存から離れ始めたこの四条室町という場所において、建築と都市の関わり方を考える

家同士や周辺との関係を無視した開発ではなく、また都市開発そのものを否定するわけでもない。京都に根付く家と町との関わり方を再構築し、後に伝えてゆくような建て替え計画を構想する

St. Muromachi

St. Shijyo

Site

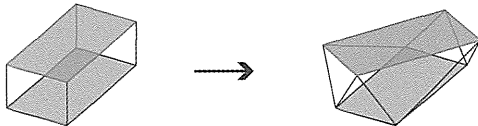
## ■ Concept

— 奥行きを纏う建築 —

内部空間の連なり方、建物同士のキョリ、それらに挟まれた路地の空間性  
こうした京都の町に溢れる様々な奥行きを再構成する  
再構築された奥行きを纏う建築が、都市と建築の新たな関係性を生み出す

## ■ Diagram

・ twist

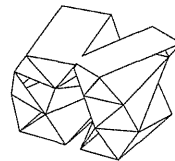


直方体のボリュームのスラブをねじる  
三角形分割された壁はモザイク状に素材が変わり  
奥行きはグラデーションのように変っていく

## ■ Program

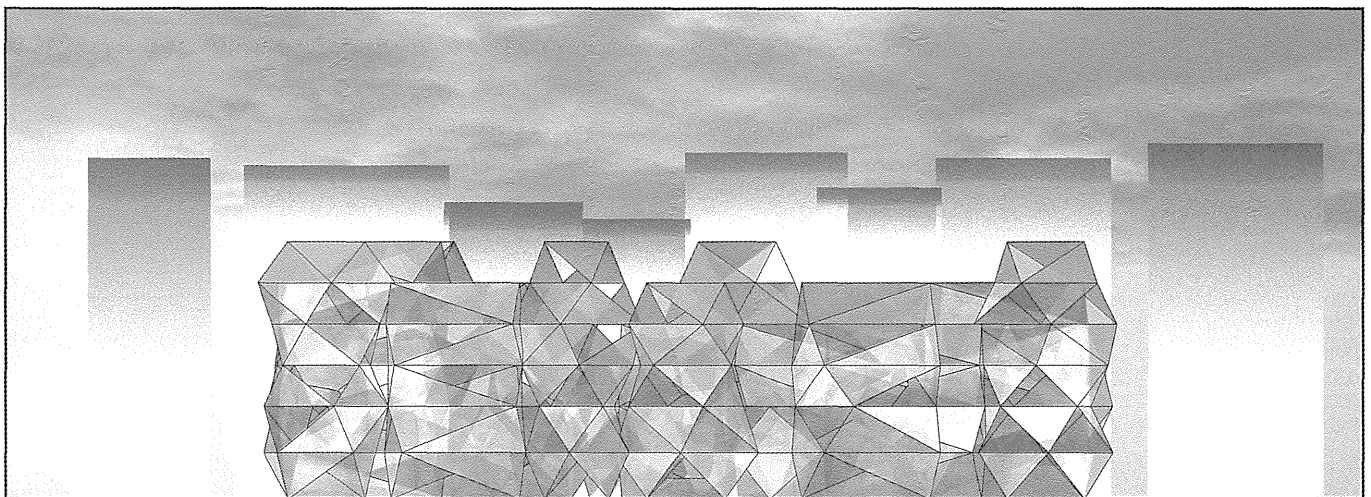
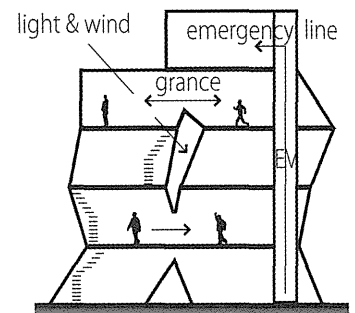
店舗・テナント    オフィス  
呉服・衣服関連の間屋    住戸  
既存の機能を担保する形で再構成する

・ stack

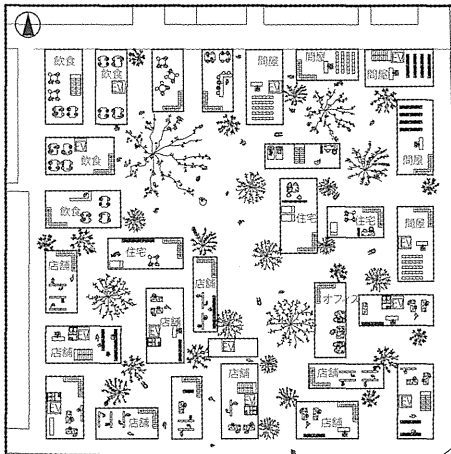


角度を変えながら積まれたユニットは  
つながったり はなれたりしながら伸びてゆく

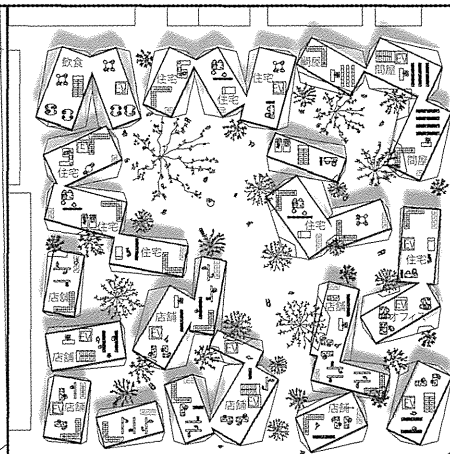
## ■ Section diagram



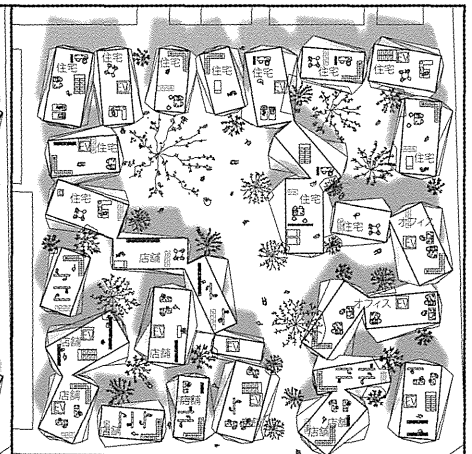
South elevation 1/600



GL plan 1/1200

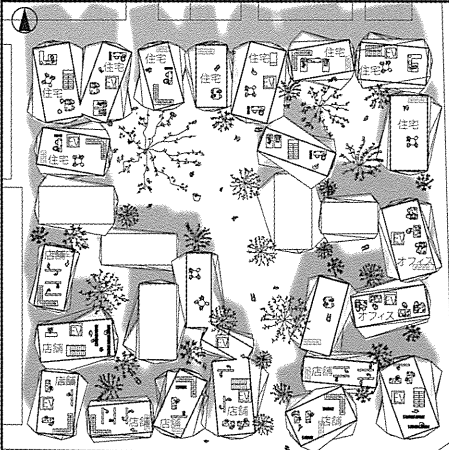
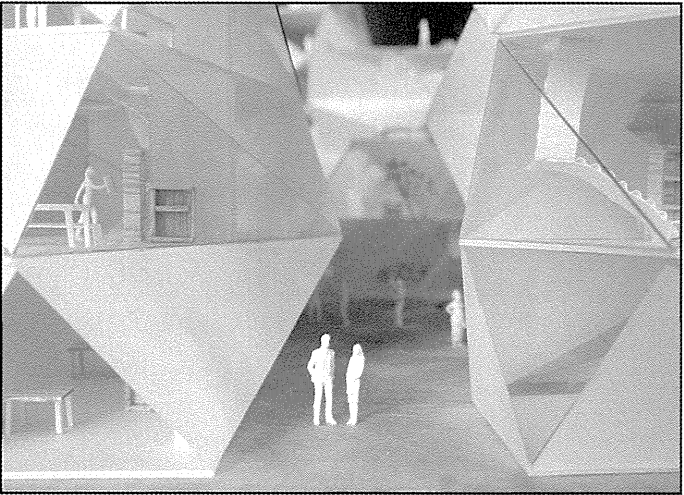
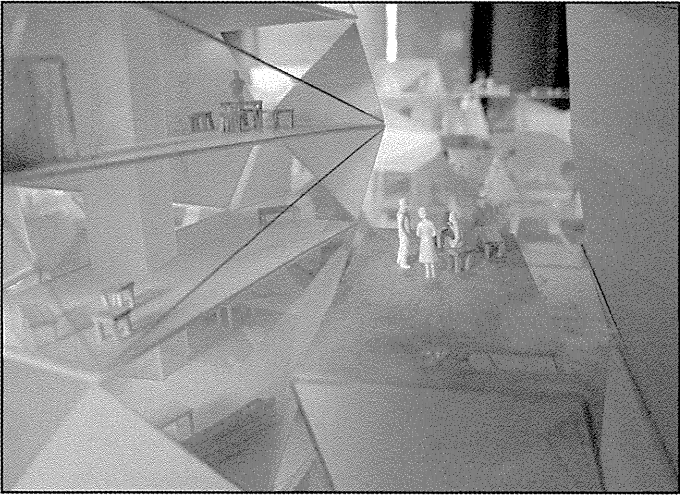
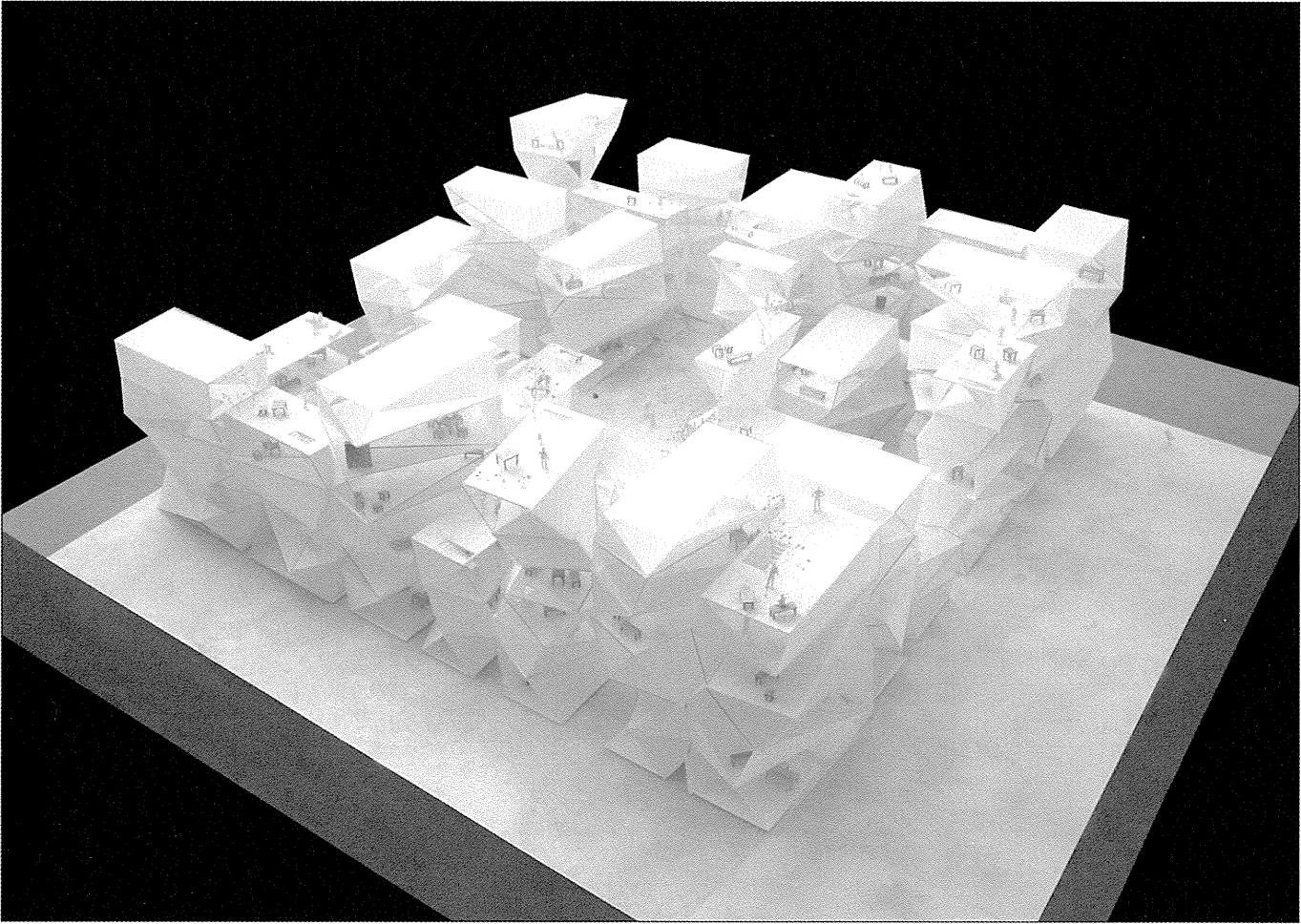


+3600 level plan 1/1200

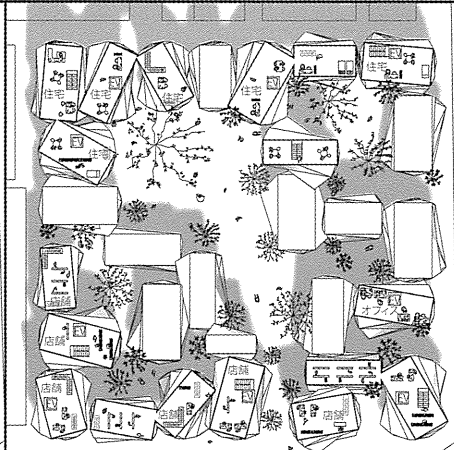


+7200 level plan 1/1200

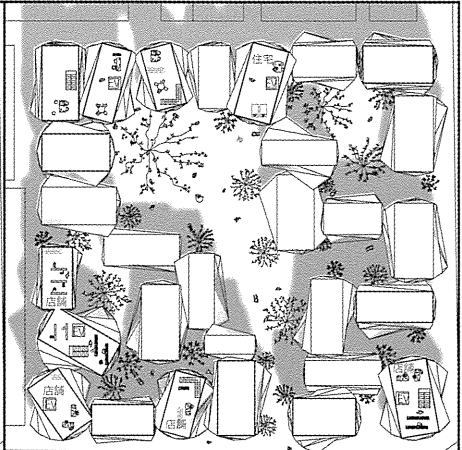




+10400 level plan 1/1200



+13600 level plan 1/1200



+16800 level plan 1/1200

京都のしかるべき敷地を選び、リズムやハーモニーといった音楽的概念の建築翻訳案を通して、豊かな建築空間を構成すること。

音楽、それは不連続な音形の連続にすぎない。この不連続な音形の時間的な変容を人は楽しむ。刹那ごと、異なる波形で戯れる音たち。その流れを読み、まとまりを読み、繰り返しを読み、破調を楽しむ。分断された空気の震えを、人は記憶の中で編み上げていくのだ。

移動する人の出会う空間たち。驚きの経験もまた、そのようにして編み上げられている。不連続な断面の連続が、体験される時間の中で形をなしてゆく。たとえば不連続な断面は音の広がり。たとえば断面の連続は音の流れ。たとえば亀裂から漏れ来る光はシンバルの一撃。たとえばそよぎわたる風は弦のトレモロ。空間を音楽のように味わう。移行する空間の体験。

人は移行する。過去と未来を往還しながら。空間に刻み込まれた出来事の記憶に、人は耳をそばだたせる。人はそこに都を開いた人々の営みを聴き、はらかな山々からもたらされた水の旅の物語を聴く。都市の未来のにぎわいを聴く。物語にそっと耳傾ける都市の余白。メタフォアとしての水の回廊。

空間は形と色と大きさを持っている。そこを光と音と香りが訪れる。空間に形と色と大きさを与えよう。そこに光と音と香りが木霊するよに。光と音と香りは水とともにもたらされるだろう。水のきらめき、ゆらぎ、さざめき、つぶやき。光る風、波の音、満ちてくる潮、そして香り。

形と色と大きさの譜面＝スコアが、光と音と香りの音楽を奏でてくれる。水は瞑想の媒介者＝メディエーターだ。生命を宿した水。文物をもたらした水。自然を潤す水。水の惑星の奇跡。

水辺は人を詩人にする。都市の余白に生まれるポエジー。どこにも属さない時間と空間。無為の時間の空間化。

人はそこでそっと、耳を澄ませる。

そこにいるだけで、人を歌声で包むような建築

ただただ人を祝福するような建築

その美を愛でつつも、いつのまにかその存在が人を愛でるような建築

そんな建築があるように、おそらく、語りかけるような建築がある。

それが何を語るかは、人がその建築になにを語りかけるかということと決して無関係でないにしても、ここでは、一人の設計者として、大いに想像力の翼を広げ、以下の如き建築を構想せよ。

まるで独白するような建築

まるでつぶやくような建築

まるでささやくような建築

まるで告げるような建築

まるで表明するような建築

まるで宣言するような建築

まるで沈黙をかたるような建築

・  
・  
・

21世紀を迎えて、大量生産・大量消費を基調としたデザインが行き詰まり、環境や社会の制約条件などを考慮して、幅広い要求を質的に満足するデザインへの転換が求められている。そこでは、デザインを「人間と環境との関係に変化をもたらす」営みとして理解し、個々の人工物のデザインにとどまらず、人工物相互の関係や人工物と環境・人間との関係に配慮することにより、豊かな環境・社会システムをデザインすることが求められている。

都市の中の建築は、他の人工物や人間・環境とのネットワークを形成する結節点として存在する。このスタジオでは、「都市と建築」のダイナミックな関係に焦点を結び、京都という都市をフィールドとして、ミクロな建築レベルの環境のデザインを通して、マクロな都市レベルの環境をデザインする可能性を探求する。具体的には、歴史都市・京都の都市空間に「魅力的な場所と風景を創発する新しいタイプの建築（の集合）」を提案する。